

二十歳の誓い

私の父は砥石屋を営んでいます。砥石とは刃物を磨き削ることで、鋭くしたり綺麗にするための石です。京都の伝統工芸品を陰で支え、造られる過程で使用するカンナや、大工さんが使用するノミなどの刃も、包丁同様に切れ味を良くします。100年以上もの歴史があり、祖父から受け継いだ父は、ただひたすら砥石と向き合い、「しゅっしゅっしゅ」という刃物を研ぐ音の中で私は育ってきました。そんな父とはあまり遊んでもらった記憶もなく、家族旅行も父は仕事があるのでいつも留守番。何かあると怒られてばかりで、怖くて父を遠ざけていました。

そんな父が私にとって大きな存在になったのは、小学6年生のある出来事がきっかけでした。真面目な性格だったからこそ羽目を外し起こしてしまった事件で、自分でどうしていいかわからず、毎日家に帰っては泣いていました。変だと気付いた母は「どうしたの？」と聞いてきましたが、黙ったまま何も言いませんでした。それから数日後、私は苦しくて母に打ち明けることにしました。私が起こした事件を父も知り、父に怒られると考えただけで怖さが倍増したことを覚えています。自分でも悪いことをしたとわかっていましたが、どうすることもできず。学校を休み、暗い寝室に一人でいると、父が入って来ました。情けなさや父に怒られる恐怖心で泣き崩れていた私の横に父は座り、なぜ事が起こったのか、その時どういう気持ちだったのか質問してきました。全てを話すと、父は言いました。「自分がした悪いことをちゃんと認めること。しかし大切なことは、未来に向けて前へ進むことだ！」と。父は問題の解決の仕方も一緒に考えてくれました。そして「よくない友達との関係はキッパリとやめること。」毅然とした態度と力強い言葉で、私の心を支え、これから歩むべき道を指し示してくれました。

初めて「父の存在の凄さ」を感じ、これまでの態度を後悔し申し訳なく思うと同時に感謝の気持ちが今でも溢れてきます。父が私の道を正してくれたお陰で、それからは前に向いて進めるようになり、今この舞台にも立っていられます。

数年たった今でも、私は過去を忘れることなく生活しています。そして保育士という子どもたちが育っていく現場に立とうとしています。私の後悔を生かして、保育士として子どもたちに伝えていきたいです。

「人生は何度でもやり直しが出来る」これからどんなことがあろうと前を向いて、立派な大人になることを二十歳の誓いとさせていただきます。

今日は私たちのために、このような盛大な式典を開催いただきまして、本当にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

平成28年1月11日 新成人代表 田中咲穂